

はじめに

立命館大学人間科学研究所では文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学の構築」研究(2005年～2009年)を展開しているが、その一環として子どもプロジェクトがとりくまれている。本書は、同プロジェクトが中心となって開催した、2007年12月2日のシンポジウム「高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」(主催：人間科学研究所、後援：後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会)の報告書である。

シンポジウムは以下のようなスケジュールと内容ですすめられた。

午前の部では、基調講演1として「学童期における高機能自閉症児の自己理解の発達と障害—高機能自閉症児及びアスペルガー症候群児の発達特徴をめぐる研究動向—」別府哲さん(岐阜大学教育学部)、基調講演2として「自閉症およびアスペルガー症候群の就学前診断の可能性と教育的対応」小枝達也さん(鳥取大学地域学部)から最近の研究動向にふれつつ基本的課題について問題提起していただいた。

午後の部では、「シンポジウム—学童期における早期対応と人格発達の可能性」と題して、岡田祐輔さん(西多摩療育支援センター上代継診療所)、坂本真紀さん(立命館大学人間科学研究所客員研究員/京都市立西総合支援学校)、窪島務さん(滋賀大学教育実践センター/NPO法人滋賀大キッズカレッジ)および荒木穂積(立命館大学産業社会学部/同大学院応用人間科学研究科)の各シンポジストから、最近の研究動向と関わって取り組んでおられる最新の研究成果を報告していただいた。指定討論として望月昭さん(立命館大学文学部/同大学院応用人間科学研究科)、青山芳文さん(京都府総合教育センター)、石坂好樹さん(京都桂病院)からコメントをしていただいた。

報告者のみなさんには、当日の報告に修筆を加えていただいた。全体として「高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」の現在の研究・実践の最前線の動向を伝える内容になっているのではないと思う。

本報告書を活用していろいろな場で活発な意見交換がおこなわれることを期待している。

2007年2月25日

コーディネーター 荒木穂積

ごあいさつ

望月 昭

(立命館大学人間科学研究所所長)

立命館大学人間科学研究所所長の望月と申します。今日は朝からたくさんの方にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

今回の、「高機能自閉症児及びアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」、このシリーズは既に今回で3回目を迎えまして、毎年大変多数の御参加をいただいて、研究所の一つの目玉となっております。

人間科学研究所

今回のシンポジウムの母体となるファンドについてお話したいと思います。右の図が、立命館大学人間科学研究所という研究所のホームページで、これは学部や専攻を超えて、広く人間科学について言及する研究者や院生が集まってプロジェクトを展開しています。

後でぜひこのホームページを見ていただきたいのですが、これまでの活動や刊行物など、うちは『人間科学研究』という雑誌を出しておりますけれども、これは最近外部からの査読者もつけまして、クオリティアップを図っております。英文アブストラクト等も海外に出しておりますなかなか注目されています。非常に幅の広い内容が含まれております。

そして今回、荒木先生が中心となって企画しているこのシンポジウムのシリーズは、荒木先生が属されるあるプロジェクトの経過報告、成果報告ということにもなっております。

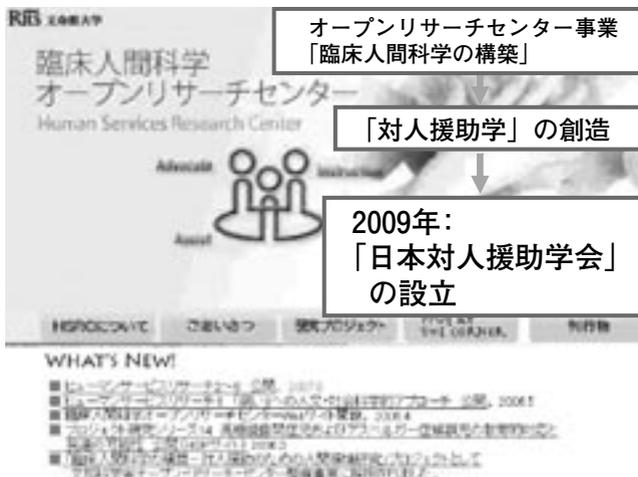
臨床人間科学オープンリサーチセンター

それでは、まず大きな母体となりますファンドは何かと申しますと、「臨床人間科学オープンリサーチセンター」という研究ファンドがありまして、文部科学省からの補助を受けて研究しています。今、これがかなり大規模な



レベルで始まっております。2001年から「学術フロンティア推進事業」、そして2005年からこの「オープン・リサーチ・センター整備事業」と継続しております。

これら一連の研究プロジェクトで、我々は一体何を考えようとしているかというと、このオープン・リサーチ・センター事業全体のテーマは、「臨床人間科学の構築」、具体的には「対人援助学」という新しい学問をつくりたいということです。ただそう口で言ってるだけではなくて、「対人援助学会」という具体的な組織をつくろうと思っております。それで、今年度かなりいろいろな試みをいたしまして、何とか2009年から「日本対人援助学会」、「日本」にするか、「国際」にするかで悩んでるんですけども、対人援助やヒューマンサービスということに特化した学会をやれないだろうかというふうなことを考えております。要するに「助ける」ということに特化して、一体どういうふうなことができるかということです。今現状で、今日の話にもあるように、学校教育等では特別支援という言葉が使われます。「支援する」ということは、例えば今までの教育とはどう違うか。これは、どうも福祉でもないし、心理学でもない。いろんな形のいろんな専門の人間が集まって、課題解決型の方法でアプローチしていく、そういう方法論を立ち上げる、そんなことを考えています。後で全くがらっと立場が変わって、指定討論とい



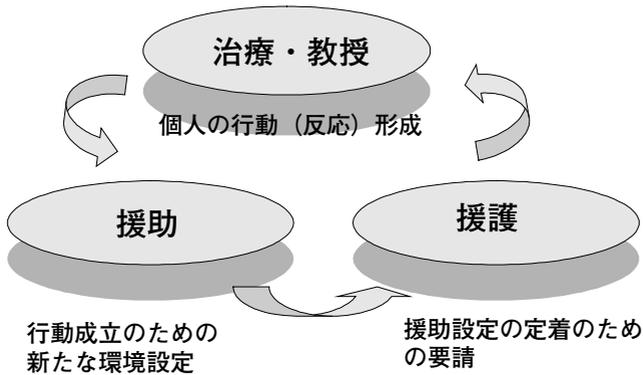
う形が出てきてそのときにお話しますが、一旦今までの学問領域をちょっと解体した上で、当事者にとって一番何がいいかということを考えていきたいと、そんなことを全学挙げて一つのプロジェクトとして考えていきたいと思っています。

「対人援助学」の位置づけ

今、対人援助学というものを、荒木先生らと一緒に立ち上げようとしているわけですが、本学でもいろいろと類似の学問が出てきました。例えば、グローバルCOEプログラムを取っている「生存学」創成拠点、立岩真也さんという有名な方ですから御存知だと思いますが、そういうプロジェクトも立ち上がっています。我々のほうが一応老舗で、この10年間ぐらい「助ける」「対人援助学」というのをやっています。さらに本学では映像学部というのでもできました。これを何とか組み合わせて、勝手にここで言ってるんですけど、「生きること」、それから「助けること」、そして「それを見せること」という、そういう大きな流れの中で共生社会を実現していく、そういうことを全体に打ち上げることができないかというようなことも考えてます。

その中でうちは、「助ける = 対人援助の学」というところで話をしてい

対人援助の方法は進歩しているのか



たい。その方法論をつくりたい。本日のこのシンポジウムもその中のプロジェクトの一つで、荒木先生が所属している子どもプロジェクトというのが、もう10年間に渡りやってきていらっしゃいます。創思館という研究棟で遊んだりほかの保育園へ行ったり、全国とネットワークを結びながら、「発達」というキーワードのもとでこの研究を推進しておられます。

対人援助の方法は進歩しているか

というわけで、きょうの見どころとして、3年目でもあり、3年連続いらした方は特にこのシンポジウム自体が進歩しているか、「対人援助の方法は進歩しているのか」について考えていただきたいと思います。この点については後ほど触れたいと思います。世間はどんどん流れておりますから、それに対応した形で対人援助の方法についても考えていかななくてはいけないと思うんです。この点に注目しながら批判的に見ていただき、後で御質問等いただければと思います。では、長丁場ですけれども、どうぞよろしくお願ひします。

(もちづき あきら)